

新生児聴覚検査のながれ

新生児聴覚検査(初回検査)

リファー
(反応なし)
(要再検)

パス
(反応あり)

確認検査

リファー
(反応なし)
(要再検)

パス
(反応あり)

精密検査

聴覚障害あり

聴覚障害なし

早期治療

早期(生後6か月以内)に療育を開始しましょう。

検査終了

この時点で聞こえに問題は
ありません。
今後も聞こえの様子に気
をつけ、市町村の乳幼児健診
で聞こえやことばのチェック
を受けましょう。

赤ちゃんのきこえとことばの発達のめやす

ことばの発達には個人差がありますので、気になるときは、かかりつけの医師や市町村保健センターにご相談ください。

2~3か月頃

- ①話しかけると、アーとかウーと声を出して喜ぶ(またはニコニコする)。
- ②ラジオの音、テレビの音、コマーシャルなどに顔(または眼)を向けることがある。

5~6か月頃

- ①父母や人の声など他人の声をききわける。
- ②話しかけたり歌をうたってあげるとじっと顔をみている。
- ③声をかけると意図的にさっと振り向く。

9か月頃

- ①外のいろいろな音(車、雨、飛行機など)に関心を示す。
- ②音楽や歌をうたってあげると手足を動かして喜ぶ。
- ③ちょっとした物音や、ちょっとでも変わった音がするとハッと向く。

12~15か月頃

- ①となりの部屋で物音がすると、不思議がって耳を傾けたり、あるいは合図して教える。
- ②目、耳、口、その他の身体部位をたずねると指をさす。

(一社)日本耳鼻咽喉科学会「新生児聴覚スクリーニングマニュアル」より

新生児聴覚検査のご案内



新生児聴覚検査については、かかりつけの医師、またはお住まいの市町村保健センターにお問い合わせください。



発行 埼玉県保健医療部健康長寿課母子保健担当
〒330-9301 さいたま市浦和区高砂3-15-1
TEL 048(830)3561(直通)

埼玉県マスコット「コバトン」「さいたまっち」

新生児聴覚検査とは？

赤ちゃんの聴覚に問題がないかを早期に確認する検査です。

「聞こえにくさ」は目に見えないので気づかれにくいですが、1000人に1～2人の赤ちゃんが生まれつきの聞こえにくさがあるとされています。

検査により、聴覚の問題を早期に発見し、適切な治療を行うことで、赤ちゃんの言葉の発達と心の成長に大きな効果が期待できます。



Q1 検査は受けた方が良いのですか？

A1 赤ちゃんが聞こえているかどうかは外見だけではわかりにくく、赤ちゃんの様子だけから判断することは困難です。

全国でも9割近くの赤ちゃんが検査を受けています。ぜひ検査を受けましょう。



Q2 どのような検査ですか？

A2 赤ちゃんが眠っている間に、小さな音を聞かせてその反応を測定する検査です。検査は数分から10分間程度で安全に行うことができ、痛みや検査による副作用はありません。



Q3 いつ検査をしたら良いのですか？

A3 出生後入院中に、出生した医療機関で行います。遅くとも生後1か月までに検査を受けましょう。医療機関が検査を行っていない場合は、検査可能な医療機関を紹介してもらいましょう。



Q4 検査の結果が「パス(反応あり)」だったときは？

A4 今回の検査では聞こえに問題はありません。しかし、成長過程で中耳炎やおたふくかぜなどによって聞こえの問題がおこる場合もあります。

今後も聞こえの様子に気を付け、市町村の乳幼児健診で耳の聞こえはどうか、ことばの増え方は順調かななどの確認を受けましょう。

心配な時は、かかりつけの医師、またはお住まいの市町村保健センターにご相談ください。



Q5 検査の結果が「リファー(反応なし)」だったときは？

A5 初回の検査で、「反応なし」の場合、必ずしも聞こえの問題があるとは限りません。

生まれたばかりの赤ちゃんは、耳に液体(羊水)が残っているなどの原因により、検査にパスしないことがありますので確認検査を受けましょう。

確認検査でリファー(反応なし)の場合、精密検査機関での検査が必要です。



Q6 精密検査とはどのような検査ですか？

A6 精密検査は、耳鼻咽喉科の専門医療機関で、耳の診察や月齢に応じた音に対する反応をみる検査です。

精密検査は健康保険が適用されます。乳幼児医療費助成制度の対象となります。



Q7 精密検査の結果、聞こえに問題があるとわかった場合、どうすれば良いのですか？

A7 赤ちゃんの耳の聞こえに問題がある場合には、聞こえの程度に応じた対応と言葉の育ちのお手伝いをする専門の部門や療育機関への相談が必要です。

専門機関での早期療育は、コミュニケーション手段の早期獲得につながります。

